

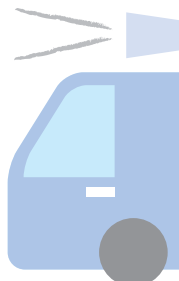
杉並 ぐるる

つなぐ ひろがる
ささえる

2017年11月発行 vol. 6

今号の主な内容

- 「買い物弱者」解消へ移動スーパー！
—地域ぐるみで取り組む善福寺……………1～2面
- なみきおじさんの生活支援体制整備キーワード説明
—「身近な地域で話し合う場（第2層協議体）」……………3面
- 生活支援サービス活動団体の紹介
—「たすけあいネットワーク」の事業者連絡会……………4面



「買い物弱者」解消へ 移動スーパー！ 地域ぐるみで取り組む善福寺

「買い物弱者」という言葉をご存知ですか。それは高齢者の平均的な徒歩移動距離500mから1kmの範囲内に、生鮮品を取り扱う店舗がない地域に住む主に高齢者のことです。杉並区内では善福寺2・3・4丁目も買い物弱者がいる地域。その困り事を解決しようと、町会や地域包括支援センター（ケア24）など関係者の働きかけで今年4月末から軽トラックに野菜などの食材を載せて販売する移動スーパー「とくし丸」が毎週来るようになりました。その試行錯誤と地域ぐるみの取り組みを紹介します。

「とくし丸」がやってきた！

善福寺4丁目の「ぐるーぷほーむ はこぶね」（認知症高齢者グループホーム）に「とくし丸」の到着を知らせる音楽が流れます。来店する男性に、「いらっしゃい。いつものあるよ!」と元気に声を掛ける店主。男性は毎週、お気に入りアイスを買いに来るお得意様だとか。

4月27日に始まった「とくし丸」は、毎週木曜日の午後3時から1時間弱オープンし、10人前後が買い物に訪れます。「はこぶね」からは4～5人の女性が出てきて、おしゃべりを楽しみながらお買い物。「はこぶね」で開催している歌のサークルへの参加者です。活動が終わっても施設内で販売車が来るのを待っているそうです。

販売車の横にはビーチパラソルとベンチが用意され、買い物したあともゆっくりおしゃべりを楽しめます。これは「はこぶね」施設長の辻清哉さんの工夫で、「介護施設というと敷居が高いですが、地域の方も気軽に立ち寄れる場所にしたい」との思いが込められています。

近隣に住む金成さんは、「はこぶね」のイベントの手伝いなど施設運営に積極的に協力し、販売車が来る日はお客さんとしてはもちろん、販売スペース確保のために自宅駐車場を施設車両のために提供しています。「『とくし丸』が来てからは、向こう三軒だけではなく、裏のブロックの方とも顔見知りになりました」と金成さん。「とくし丸」は地域住民の出会いの場にもなっているようです。



商品満載の販売車

地域の関係者が「考える会」を設立

「買い物場所が遠くて困っている」。ケア24善福寺にはこうした住民からの相談が以前からありました。ケア24はこの地域課題をどう解決したらよいか思い悩んでいましたが、「とくし丸」のチラシを見た時、「これだ!」とひらめきました。

「とくし丸」は、買い物弱者の救済をモットーに食材の“出張販売”を展開している事業者。軽トラックの荷台に所狭しと商品を載せて、スーパーがない地

域を巡回しています。これを「善福寺地域にも導入できないか」と考えたケア24は今年1月、地元の町会長、民生委員、福祉施設関係者、地域住民などと「とくし丸を考える会」を設立しました。

ニーズを見極め、住民の声を聞く

まず取り掛かったのは「本当に地域住民は買い物に困っているのか」という実情のヒアリング。すると、考える会のメンバーからは「自分の周りでは買い物に困っているという声はあまり聞かない」という意外な意見も出ました。そこでケア24善福寺は、買い物弱者になっている住民の実例を紹介したり、福祉施設からの要望などを丁寧に説明したりして、理解を求めました。「ケア24に寄せられる相談だけではなく、本当にその困りごとが地域ニーズなのかを見極める必要性を実感しました」と振り返ります。



雨でも来店するお得意様

「とくし丸」が初めて善福寺地域を訪問したのは4月末。それまでの間、考える会では「とくし丸」導入の賛否や実際の運営方法など、さまざまな議論が交わされました。その中で「いいことだと、結論ありきで話を進めないほうがいい」と述べたのは本橋岩治善福寺町会長。長年の地域活動の経験から、「住民の声を聞きながら自然発生的に進めていくことが、活動が地域に根付く秘訣」という本橋さんの発言は、事業プロセスに重要なヒントとなりました。

おおむね導入に前向きな意見が多いなかで、一番の問題は「とくし丸」の開設場所。複数の福祉施設が候補に上りましたが、販売時の音声アナウンスの問題などで場所が絞られた結果、「はこぶね」に決定しました。“受け皿”となった「はこぶね」の辻施設長は、「施設利用者にとって、自分で選んで物を買うという日常はとても

大切なもの。地域と施設の交流を促すきっかけにもしたい」と話します。

地域に根付いた「場」に向けて

買い物難民解消に向け順調なスタートを切った活動ですが、継続していくには課題が少なくありません。例えば、「とくし丸」がこの地域で販売を続けるためには、安定した売り上げが必要になりますが、現在はほぼ口コミによる集客のため、お客さんは施設利用者や一部の近隣住民に限られています。広報をどうするか、子どもを含めて多世代が利用できるにはどうするか等々、課題は多くあります。一方、地域の住民による支援、自然に生まれた地域の居場所など、地域の支え合い活動へ広がりつつあります。

ケア24善福寺センター長の笹室さんや「はこぶね」の辻さんは「自分たちはあくまでも発案者や場所提供者。今後はサポーター的な立ち位置の方が望ましい」と考えています。大切なのは、サービスを必要とする人や近隣住民が主体的に関わりながら、地域に根付いた活動として継続し、広げていくことです。

笹室さんは「成功事例です、と胸を張って言えるわけではありません。最初からもっと当事者も参加した検討の場を設けるべきだったという反省もありますし、ケア24の立ち位置に悩みもあります。ですが、活動を始めたことでプロセスの大切さや地域課題を改めて認識することができました」と明かします。

「買い物に困っている」という相談が発端になり、地域の支え合い活動につながったこの善福寺地域の事業。地域活動の大切なポイントを複合的に示した事例と言えそうです。



右から中村さん(とくし丸店主)、金成さん、辻さん、笹室さん

今号のキーワード

「身近な地域で話し合う場(第2層協議体)」



杉並の様々なところで芽生え始めた助け合いによる生活支援サービス、例えば、電球の取り換えやごみ出しなどのちょっとした生活支援や、ご近所の集いの場、外出支援などは、高齢者が増えていく中もっとも大切になるよね。でもね、杉並区の課題ってどこも同じなのかな？

そうじゃな。杉並区内でもそれぞれの地域に特徴があり、必要とされる助け合いの活動も地域によって少しずつ違うの～。すでに活動が広まっているところもあれば、不足しているところもある、地域でまちまちなんじゃよ。



買い物する商店が近隣に少ない、町会や自治会がない、坂道が多い、近隣とのつながりが薄いなど、その地域特有の課題で必要とされる支援も違ってくるよね。



その通りじゃ。そこで杉並区では、身近な地域で(ケア24の担当区域ごとに)活動する個人や団体などが集まり、話し合う場を設けることとしたのじゃ※。話し合いの場では、参加者が横のつながりを持ち、その地域の課題を共有し、安心して住み続けるために何が必要か、地域でできることは何かなどを皆で話し合うそうじゃ。



日々の生活の中で、自分の地域に必要なことや、できることって何かを考える、これって安心して住み続けられる地域への一番の近道かも。

【注釈】杉並区では、地域の活動者や団体が参加し情報共有と連携強化を図り、高齢者が安心して住み続けられる地域について話し合う場の設置を進めています。平成28年度より杉並区全体について話し合う場(第1層協議体)を設置し、平成30年度中を目途にケア24の担当区域ごとに話し合う場(第2層協議体)の設置を目指しています。

予告

生活支援体制整備
講演会のお知らせ

高齢者が安心して住み続けられる地域づくりについて理解を深める講演会です。

日時 平成30年2月19日(月)午後 ※予定
会場 西荻地域区民センター(勤労福祉会館) ホール
講師 木原 孝久氏(住民流福祉総合研究所)
申込み 不要

※詳しい内容と時間は広報すぎなみ2月1日号に掲載予定です。

★今回は地域の見守りを行う「あんしん協力機関」の特集です★



地域の見守りで協力機関の連携を 「たすけあいネットワーク」の事業者連絡会



一人暮らしの高齢者らを地域で見守る仕組み「たすけあいネットワーク（地域の目）」には「あんしん協力員」（区民ボランティア）と「あんしん協力機関」（企業などの賛同団体）の活動があります。10月25日、高齢者活動支援センター（高井戸東3丁目）で「あんしん協力機関」として登録された警察、消防など行政機関や民間の業界団体、NPO法人など47機関・団体の60人と区、および地域包括支援センター（ケア24）職員35人が一堂に会して事業者連絡会が開催されました。講演とグループワークが行われ、日常業務の中で気になる高齢者への対応、ケア24との連携などについて話し合いました。



▲(株)三菱東京UFJ銀行久我山支店長 伊藤弘隆さん

銀行も高齢者を見守り

参加したのは行政機関のほか、銀行、ガス・電気・水道、新聞配達、宅配、生協、コンビニ、スーパーなどの事業者や団体で、日常業務を通じて高齢者を見守りを行っています。今回の事業者連絡会は「地域の協力機関とケア24が顔の見える関係をつくり、また見守りについて情報交換をすること」が目的。参加者は7地域ごとにテーブルを囲み、名刺交換や談笑から始まりました。

講演では、(株)三菱東京UFJ銀行が同行のホームページやATM機などで行われている高齢者への取り組みとして、バリアフリー化やサポートの取り組みを説明。続いて同行久我山支店長の伊藤弘隆さんが高齢者見守りの具体的事例を紹介しました。

現場ならではの課題指摘も

グループワークでは主に各事業者の見守りの経験をめぐる情報交換が行われました。ケア24職員が進行役となり、①事業所内での見守り②ケア24と一緒に何ができるか③事業所として困っていること④個人情報保護の観点からの通報のあり方などについて話し合いました。この中で、「朝刊配達中のスタッフが気になる高齢者を見かけることがあるが、配達員は早朝に仕事を終えるので、ケア24に連絡しづらい」（新聞配達所）、「届け先のお客様の様子がちょっとおかしいと感じることがある。通報すべきかどうか判断に迷う」（配食業者）など現場ならではの困りごとが出されていました。

地域の見守りの課題が話題になる一方、積極的な取り組み事例や新たな連携に向けた話題でも、活発な情報交換がされていました。大手スーパーの事業者からは、一日に何度も同じ商品を購入するなど認知症が疑われる高齢者への対応で苦慮された事例や接し方の研修企画などの発言があり、ケア24から日頃の対応事例や声掛けのコツなどのアドバイスがありました。また、コンビニエンス

ストアのエリアマネージャーからは、各店舗とケア24との関係づくりを進めたいとの申し出に、「忙しそうにしている店員さんへの声掛けには躊躇する」とケア24。「エリアマネージャーから各店舗へケア24との関係づくりに取組むように呼びかけましょう」と提案。具体的な連携が進んでいました。

事業形態の異なる様々な事業者や関係機関が直接意見を交わせた今回の会合から、多様な見守りの可能性と、見守りの輪の広がりを感じることができました。

▼グループワークの様子

